



「EW-DX」シリーズの展示

創業以来、「現場の課題」に80年以上向き合ってきたというゼンハイザーは、優れた周波数設計性能に「EW-DX」シリーズの最新情報と導入事例、欧米で既に導入が開始されている次世代ワイヤレスシステム「SPECTERA」の先行実験など、ゼンハイザーが取り組む「現在」と「未来」を軸に積極的な提案がされた。

その筆頭となるのが、EvoLution Wireless Digital Series「EW-DX」だ。長年培ってきたワイヤレス技術と音響設計のノウハウを結集。プロフェッショナル現場におけるワークフローの簡

素化を実現するデジタルワイヤレスシステムで、優れた周波数設計性能によって、多チャンネル時代のワイヤレスマイク運用を効率的に収束できる。ゼンハイザーは「多数波時代をリードするワイヤレスマイクの選択肢となる。従来のシリーズをなぞった製品ではなく、文字通りゼロから設計された製品で、感度設定が不要な134度のダイナミックレンジ、1・9秒の低遅延性能、相互変調歪を極限まで抑えた周波数の等間隔配置

ゼンハイザーが技術セミナーイベント開催

ワイヤレスマイクの最新動向

「EW-DX」シリーズ1.2GHzモデル発表

での安全な運用、そして電波環境を素早くスキューンし安全な周波数を自動で検出するAutoScan機能でのスムーズなシステム構築が特徴」と話す。

◆「EW-DX」シリーズの構成

受信機はハーフラック（2ch）と1Uラック（4ch）の2種類。1UラックサイズのモデルはDante標準搭載（ハーフラックモデルはDante搭載/非搭載の2種類）で、アンテナ入出力を搭載（ハーフラックは入力のみ）。最大4ユニット、16チャンネル分はスプリッタなしのカスケード接続で運用することが可能（ハーフラックは別途スプリッタが必要）。

送信機はハンドヘルド、ポディバック、テーブルスタンド型を用意。ハンドヘルドは縦型スライドスイッチの有無が違い、専用バッテリーは最大12時間駆動が可能となっている。

また、送信機にDanteディスプレイが搭載されているため、電源がOFFの状態でも画面表示が消えず、テープなどでも誰のマイクかが簡単に確認できるようになっている。テーブルスタンド型の送信機は3Pin/5Pinの

WOWOWの導入事例も報告

大12時間駆動、乾電池2本でも最大8時間の駆動が可能だ。

また、送信機にDanteディスプレイが搭載されているため、電源がOFFの状態でも画面表示が消えず、テープなどでも誰のマイクかが簡単に確認できるようになっている。

ダイナミックレンジが広い、ボーカル、ギター、ベースも入力可能。また、管楽器用のマイクとしても運用可能。

「送信機は基本、設置の手間がほとんどなく、企業系を含む各種イベントセンター設備プロダクト

可能となっている」（新明氏）という（新製品の場での運用性、操作性などに優れていた点が高評価だった。システム構成も受信機に2波・4波の現場の絶対数増大、そして個々の現場の複雑化と人手不足に対応する切り札として、ゼンハイザーが準備しているのが、

「e-link」を含め、相対的に優れた機能性を示した「EW-DX」を選んだ。同社セールスマン、代ワイヤレスシステム「SPECTERA」だ。ワイヤレスシステムとなる「SPECTERA」は、1つの電波で1つのオーディオを送る従来のナローバンドワイヤレスマイク、イヤホン

同社は1・2GHz対応モデルについても、導入を検討中としている。

◆WMASS搭載「SPECTERA」を実践する現場の絶対数増大、そして個々の現場の複雑化と人手不足に対応する切り札として、ゼンハイザーが準備しているのが、

「良い音をオーディオのワイドバンドの1つの電波でイヤホンモニターやマイク複数のオーディオを同時に双方向利用できる点が最大の特長。32本のマイクとコントロール、16のイヤホンとコントロールなど、1Uサイズの据置ユニット1台で最大64ch同時に運用可能とすることで、リソースを効果的かつ効率的に活用することが可能となる。

WMASSの利用が認められているEUや北米、南米など53カ国では、昨年5月の発売以降で1万4000台以上を導入。認可を待つ日本や中国、韓国などにおいても、既に問い合わせが多く寄せられている状況だ。

当日のイベントでは、特別に許可を受ける形で運用デモを実施。同社エンジニアの藤井宏幸氏は「周波数の利用効率があり、何かあったときの逃げる箇所が増えるなど、メリットの多いシステム。本日のデモンストレーションを通じて、ゼンハイザーのWMASSの利便性の高さや運用の変化への理解を深めていただければ」と述べた。

その他、合同会社dcq、代表の西脇史朗氏が登壇したセッション「SoundBase製品紹介」で、特定ラジオマイク運用調整機構「テクニカルディレクター」の甲田乃次氏による「特定ラジオマイク現状報告」などが実施された。

大12時間駆動、乾電池2本でも最大8時間の駆動が可能だ。

また、送信機にDanteディスプレイが搭載されているため、電源がOFFの状態でも画面表示が消えず、テープなどでも誰のマイクかが簡単に確認できるようになっている。



WOWOWの栗原氏



dcqの西脇氏

「良い音をオーディオのワイドバンドの1つの電波でイヤホンモニターやマイク複数のオーディオを同時に双方向利用できる点が最大の特長。32本のマイクとコントロール、16のイヤホンとコントロールなど、1Uサイズの据置ユニット1台で最大64ch同時に運用可能とすることで、リソースを効果的かつ効率的に活用することが可能となる。

WMASSの利用が認められているEUや北米、南米など53カ国では、昨年5月の発売以降で1万4000台以上を導入。認可を待つ日本や中国、韓国などにおいても、既に問い合わせが多く寄せられている状況だ。

当日のイベントでは、特別に許可を受ける形で運用デモを実施。同社エンジニアの藤井宏幸氏は「周波数の利用効率があり、何かあったときの逃げる箇所が増えるなど、メリットの多いシステム。本日のデモンストレーションを通じて、ゼンハイザーのWMASSの利便性の高さや運用の変化への理解を深めていただければ」と述べた。

その他、合同会社dcq、代表の西脇史朗氏が登壇したセッション「SoundBase製品紹介」で、特定ラジオマイク運用調整機構「テクニカルディレクター」の甲田乃次氏による「特定ラジオマイク現状報告」などが実施された。

当日のイベントでは、特別に許可を受ける形で運用デモを実施。同社エンジニアの藤井宏幸氏は「周波数の利用効率があり、何かあったときの逃げる箇所が増えるなど、メリットの多いシステム。本日のデモンストレーションを通じて、ゼンハイザーのWMASSの利便性の高さや運用の変化への理解を深めていただければ」と述べた。



ゼンハイザー プロフェッショナルワイヤレス・イノベーション2026



PAエンジニアの西脇氏(右)は、複数のワイヤレス機器をネットワーク上で一元管理するSoundBaseを解説。そのクラウド運用についても言及した

次世代システム「SPECTERA」デモ

WMASS対応で64ch同時運用を実現

世界初のWMASS双方向マルチチャンネル伝送のデジタルワイヤレスシステムとなる「SPECTERA」は、1つの電波で1つのオーディオを送る従来のナローバンドワイヤレスマイク、イヤホン

当日のイベントでは、特別に許可を受ける形で運用デモを実施。同社エンジニアの藤井宏幸氏は「周波数の利用効率があり、何かあったときの逃げる箇所が増えるなど、メリットの多いシステム。本日のデモンストレーションを通じて、ゼンハイザーのWMASSの利便性の高さや運用の変化への理解を深めていただければ」と述べた。